

※インターネット「はらまち九条の会」で、「九条はらまち」の全号を見ることができます。
 ※「はらまち九条の会」は会員約390名。超党派で会員を募集中です。年会費千円。



九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.111 せんいちこう 千日紅
 2009(平成21)年10月 1日(木)発行



<1949(昭和24)年10月1日は、中華人民共和国成立の日。今年2009年は建国60周年>
 ○アヘン戦争以来の列強の植民地化、さらに日本の侵略や満州国建国、日中戦争、さらに国共内戦に勝利し、ようやく毛沢東により新中国成立が天安門で宣言される。<左写真>
 ○今年は建国60周年記念の国慶節にあたり、大規模な軍事パレードを行う。一体あれほどの軍備でどこの国と戦うつもりなのか、どの国の人々を殺すための武器なのか、抑止のための軍備というのか、あるいはどこの国にあのような軍備を売るつもりなのか。時代錯誤の中国です。

はらまち九条の会ホームページ

いよいよ来月開設へ

- 10月20日、本会事務局会の定例会が開かれました。
- 今回は事務局員6名に加え、インターネットの本会ホームページを担当していただく大浦祥見、菅野恵子、平野敏彦さんも出席され、ホームページを11月開設予定とし、その内容、担当割りあて、経費などを検討。また、10月発行のこの会報についても話し合いました。
- 「九条の会」ホームページは県内では、県・いわき・相馬市などが開いていて、相馬市がすばらしい内容です。



▲事務局会は毎月中旬、夜7時から9時頃まで平田会長宅で開いています。(写真は10月20日の事務局会の様子)

DVD鑑賞「加藤周一九条を語る」

- 11月7日(土) 16:00~16:45
- 会場:ステーションプラザホテル6階 (原ノ町駅東)
- ・主催:相双教職員九条の会
- ・後援:はらまち九条の会

11月の「あきいち」に本会是不参加です

06年と昨年08年の11月3日、原町名物「あきいち」に本会も参加し、原町区駅通りで「9条ブース」を開いて市民にアピールしてきました。今年も「平和と戦争展」で参加の予定でしたが、事務局員の半数が所用でどうしても参加できなくなりました。残念ですが、次回に頑張りたいと思います。

核兵器なき世界・戦争のない世界・軍隊もない世界のために



9月26日・映画「GATE」上映会(朝日座)/150名が入場
 上映会を開いて「グローバルライン原町」代表 高橋美加子(会員)

「グローバルライン原町」では今年度の活動として、9月26日・朝日座に於いてドキュメンタリー映画『GATE』の上映会を開催致しました。

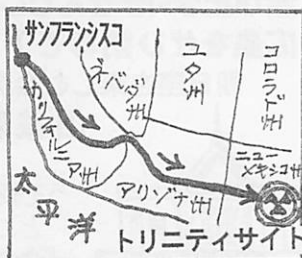
本当の平和とは何か、ヒロシマの原爆の火を原点に戻し、すべてを断ち切るため、60年間閉ざされたままの最初の原爆実験施設アメリカ・トリニティサイトのゲートへ2,500キロを歩く日本人の僧侶たちの旅を追うドキュメンタリー映画です。映像、音

楽、ナレーション共に、趣旨に賛同する各界最高レベルの人たちのボランティアにより質の高い映画となり、見た人の心に残る上映会になったようで、会員一同喜んでおります。

入場者数は3回で約150名。会員数8名という小さな当会にとって、「九条の会」の皆さんの協力は大きな支えでした。おかげさまでチケットの販売も何とかなり、小額ながら当初の目的の一つである「世界核兵器解体基金」への募金も実行できました。

「グローバルライン原町」では、世界が平和であること・貧困をなくすこと・人々が特に子どもたちが心も体も満ち足りた生活を送ることを願って活動しています。このことは「九条の会」の皆さんと合い通じることではないでしょうか。これからも同じ方向で歩んでゆけることを願っております。どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(裏面の映画感想文もご覧ください)





核兵器なき世界・戦争のない世界・軍隊もない世界 のために

9月26日・朝日座・核兵器廃絶をめざすドキュメンタリー 映画「GATE(ゲート)」上映会

映画「GATE」を見て

原町区北町 斎藤久夫(会員)

映画の印象はとても深いものだったが、それには幾つもの理由があった。映画を見終わった後、もう一度、すぐに、彼らと共に旅をしたいと思った。場面ごとにフィルム回転を止め、ゆっくりと確認しながら見たいと思った。

彼らの歩くニューメキシコまでの道は暑く「山を越えた〇〇は53度だ。△△は43度だ。良い季節にきたな。」偶々入った夜のスナックでの会話には、あの西部劇の乱暴で親密さに満ちた会話があり、ロードムービーとは対極にある映画なのに、キャデラック風の大型のオープンカーが寄ってきて、まるい帽子(絵本ではそう訳されているらしい)を被って歩いている僧侶たちに、見知らぬ男が、翡翠を一個渡して引き返して行く、そんな場面もあるのだ。(翡翠は、トリニティーサイトに納められた。)ゴーストタウンが点在する夢(歴史)街道「ルート66」も歩いている。ナットキングコールの歌が聞こえて来そうなのだ。大恐慌時代(1930年代)『怒りの葡萄』のジョード一家が反対方向に、西へ、カルフォルニアの方向に走ったはずの道だ。ジョージ・オキーフが描いた牛の頭骸骨が、空に浮かんでいるのが見えてきそうだった。ネイティブアメリカンの大地も。

場面の展開は素速く、心地よかった。幾つもの情報的確に、見ている者に届けられた。GND Fund 代表のマット・テイラー監督が米露の間を頻繁に往復する中で制作されたことが、その効果を生んだのかもしれない。ドキュメンタリーであり、叙事詩というべきであろうが、叙情詩を一気に2時間見ていたように思えた。

長崎の皓臺寺住職・大田大穰氏は言う。おまえを今回の使命を果たす僧侶の一人に指名する。それはおまえが「憎悪」と「報復」の色合いを滲ませているように見えるからだ。指名された僧侶宮本氏は、広島と長崎と星野村(福岡県)の「原爆の火」を、60年の歳月の後、生まれた地へ戻す使命を果たそうとする。旅はGATEを通して、トリニティーサイトに到達する。GATEは開けられ、「原爆の火」を返すことによって「火」を消す使命を果たし、困難な環は形作られていったのだが、宮本氏の内なる環は、どんなふうになられていって、彼の旅がどのように終わったのかは、映画では分からない。

生まれる(be born)に倣って言えば、爆発したは、爆発させられた(was exploded)であり、正確には(were exploded)であり、人の思惑によって、投下され、爆発させられた「原爆の火」は、ようやく開けられたGATEを通して、最初に「原爆の火」が生み出された地に、60年の歳月を経た後に戻さ

れた。トリニティーサイトの周辺で傷ついた人たちも共にその地に立った。還は閉じられ、「原爆の火」は祈りの中で燃やし尽くされた。決してGATEの外に出ないように。決してもう爆発させられることがないように。

広島を舞台にした映画『八月のラプソディー』(黒澤明監督)は、良い人ばかり登場すると批評された。『GATE』も好意に満ちた場面の連続のようにも見えた。しかし辛いシーンも経験しているのかもしれない。あるいは省かれたのかもしれない。もしそうなら、それでいいのだ。私たちは知っている。どんなに對抗論理を説かれたとしても、一つの戦争、爆撃、爆発は「悲惨」に繋がっていることを。一つの死が、数十、数百の死が「惨憺」に「惨劇」に繋がっていることを。それは、人間の悲劇であり、コスミックな悲劇であることを。GATEがこちら側に開かれてはならない。オリジナルタイトルは「Full Circle」であるが、それはGATEの向こう側に閉じることを意味するだろう。

もう一度、すぐに、旅をしたいと思ったこと理由の一つには、四人の僧侶のうちの一人の僧侶を、旅の途中で見失ってしまったことにあった。たぶん、旅の後半、アリゾナのフェニックスあたりで。まるい帽子を被って、朝日座の土曜日の午後に見失った、一人の僧侶を探しに旅に出たい、そんな冗談が頭に浮かんだ。(松嶋菜々子のナレーションを聞き漏らしてしまったに過ぎないことなのに。)そんな遊びに似た、謎にもならない冗談が、穴ぼこのように、私の頭に浮かんだことは、何故かひどく大切な冗談のように思えた。残されたこれからの自分にとっての励ましでさえあるようにも思われた。

トリニティーサイトまで旅を続けた三人の僧侶のうちの一人、胃を全摘出した宮崎氏は、四年後の現在、お元気だろうか。宮本氏には、どんな変化があったのだろうか。今、彼の心にはどんな彩りが滲んでいるのだろうか。物語には終わりがあがるが、ドキュメンタリーに終わりはないのだと思う。

これから旅に出て、再びあるいは三度、GATEは通過できるのだろうか。こんな問いは、いかにもカフカ風に聞こえるが、私たちはGATEを通過してトリニティーサイトに辿り着き続けなければならないだろう。それは、私たちとさらに続く次の世代に、ずっとかされ続ける課題なのだ。

最後に、日米露の国際コラボレーションの音楽とナレーションとを出来るだけ美しく届ける努力をしてくれた、久し振りの白鳥君ありがとう(映写も。)画面の枠(frame)の周辺にかかっている、どうしても取れなかったという黒い影も、原爆の「火」(flame)を入れた、揺れるランタンの中の炎の影のように見えましたよ。



涙が止まりませんでした！ 広島をぜひ訪ねて下さい

朝日座を楽しむ会会長
山城雅昭



レトロな朝日座で『ゲート』映画上映、誠に有難うございました。正直申しましてドラマなのか、ドキュメントなのか解らず鑑賞させていただきました。終盤近くになりますと、涙が出て止まりませんでした。

私は昭和18年満州生まれで、広島の実家の里への帰国が21年でしたので爆発はしませんでした。が、わが故郷広島の実家の原爆資料館は、何度見てもこんな事人間がやって許されることなのだろうかと、あまりに酷い惨状を思い出します。ど

うぞ長崎も含めて、一度も見ておられない方は、是非訪ねていただきたいと痛烈に思いました。

ところで昨年でしたか？南相馬市民会館の多目的ホールで上映されましたドキュメント映画『食の安全?』もそうですが、いつも興味ある催し物は、できましたら、シャッターが多く下りています中心市街地に近い朝日座を、少しでも人通りを増やしていただくために、大いに利用していただければ嬉しく思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。(本会新会員)